

愛和鉄工

鉄筋自動切断機

新鋭機に更新

生産性向上、省力化実現

中部地区有力鉄筋加工業者の愛和鉄工（愛知県豊橋市、社長・及部友也氏）は、生産自動化と省力化の推進で

自社加工品の販売強化につなげる。西川工場（豊橋市）の鉄筋自動切断機を新鋭機にリプレース。本稼働を開始した。投資金額は付帯設備も含め約6千万円。

同社は本社工場と西川工場の2拠点体制で、国内大手ハウスメーカーを中心に住宅用鉄筋（商品名ミレニアムベース）は、溶接点が鉄筋の強度を上回る高強度を有し、鉄筋の引張り強さ、伸びも基

ており、最大径22ミリまでの加工に対応していることも強みとする。さらに同社のユニット鉄筋（商品名ミレニアムベース）は、溶接点

準値以上を保つAタイプ溶接（全強度鉄筋交差溶接）が可能な地区随一の技術力を有しており、耐震性能の高度化ニーズにも対応している。

これまで稼働してきた鉄筋自動切断機のうち1機が老朽化。加工スピードの低下に伴い生産性が落ちていたこともあり、切断機の更新を決めた。

このほど導入した新加工機は東陽建設工機

（大阪市）の「TFC-300SSV」。中部地区での導入は同社が初めて。SD590



更新した鉄筋自動切断機

筋を切断できる能力を生かし、複数本を同時に切断。生産性を飛躍的に高めた。搬送ローラーにはゴム製品が採用されており、騒音も低減した上に従業員の負担軽減も図った。タッチパネルによ

り直感的な操作が可能。そのため、熟練の技術者が必要としないことも特長だ。また、切断後の鉄筋を最大1千本積載できる特注ストッカーの採用で、効率的な搬出体制も実現した。

さらに鉄筋を切断機に装てんする搬送テーブルは階段形状のものが多く、同社が同時に導入した供給装置「TAS-II」では平

形状（テーブルサイズ9×約3呎）の特別仕様に変更。短時間で多量の鉄筋をテーブル積載できるようにしたことで、リードタイムの短縮にも寄与している。

及部社長は「従業員が働きやすく、働きたいのある職場づくりのため、今後も必要に応じて自動化、省力化投資を行いたい」としている。